

## はじめに

ゴンクール兄弟？

「メトロの駅でしょ？」、「文学賞だよね」というのが大方のパリジャンだ。

作品はすべて翻刻されているが、読んだ人は少ないのだ。とはいえ、ファンはなしとしない。「友の会」すらある。かつて『でもいっただいこの度し難きゴンクール兄弟とは何者なりや？』という記事が男性雑誌「リュイ」（一九七三年一月号）に載り、「パ・ジョリ・ジョリ・セ・ドウ・ココ（いかさないやね、このぼっちゃま二人）ジュールとエドモン・ド・ゴンクール」と冒頭で揶揄されていた。おまけに、この兄弟は、おぞましき旧弊であるばかりか、女性蔑視者にして、ラシスト（人種差別者）である、と、けちよんけちよんの扱いだった。だが、それでも、「その『日記』は十九世紀終わりのあの見事なしっちゃかめっちゃかの阿呆らしさ（ベティーズ）を、とことん知ろうとする御仁には必読の書」と書かれてあった。

「ベティーズ」（能天気）と、自虐的に形容されているこの時期は、いつぼうではノスタルジーをこめて「ベル・エポック」と語られる「黄金時代」とも重なっている。

フランスの十九世紀後半は、第二帝政、普仏戦争、敗戦とパリ攻囲、帝政崩壊、パリ・コミューン、第三共和国と

続き、激動した。好景気が招来され、パリは、プロシヤに破れた時期を除いて、絢爛たる隆盛ぶりを誇った。今日のフランス人、フランスは、むろん、この時代が作り出したものである。

この本は、エドモン・ド・ゴンクールのいう「人を陶然とさせるパリの生活特有のあの熱気」、その風俗、文人、画家たちの野心に満ちた生活、成熟するブルジョア層の活動、娼婦の皆さんの生態、貴婦人を始め、華やかに生きるブルジョアや庶民の女性たち、そして闊歩するジャポニスム、活躍した日本人、権力と社会のさまざまな葛藤、つまりは爛熟をきわめたこの時代のフランスを、兄弟の『日記』を機軸にして、入手できる情報をもとに、えがき出したものである。あくまでも魅力ある兄弟を念頭に置いた。一身同体と評されたほど仲の良かったこの兄弟がいかに生きたか、が主眼である。この兄弟が好きになつていただきたいのだ。これこそがフランス人、これがフランス、と読んでいただければ、さいわいである。

\*

本邦では『ゴンクールの日記』(上・下)、(斎藤一郎編訳、岩波文庫、二〇一〇年)、『ジェルミニ・ラセルトゥー』(大西克和訳、岩波文庫、初版一九五〇年、復刊二〇一〇年)、『宿命の女(ジェルミニ・ラセルトゥー)』(久保伊平治訳、世界文学社、一九四八年)、『売笑婦エリザ』(桜井茂夫訳、岡倉書房、一九五〇年)、『ゴンクール兄弟の見た十八世紀の女性』(鈴木豊訳、平凡社、一九九四年)、『歌麿』(隠岐由紀子訳、平凡社、東洋文庫、二〇〇五年)、『北斎』(隠岐由紀子訳、平凡社、東洋文庫、二〇一九年)などが刊行されている。

本書の執筆にあたって、ゴンクール兄弟の『日記』のほか多数の著作を参考にしたが、特に次の二大名著を参照させていただいた。文献史料を多大に再引用させていただいた。伏して感謝申し上げます。

André Billy, *Les Frères Goncourt*, Flammarion 1954.

Michel Cafer, *Les Frères Goncourt, un désirable de l'âme*, Presses Universitaires de Nancy 1994.